

令和元(2019)年度

日本特別活動学会 第6回 実践事例募集事業

## 推 奨 実 践 事 例

事例番号 6-3

学びを表現し、深めることができる生徒の育成

—文化祭の調べ学習「方言」を通して—

(神奈川県) 神奈川学園中学高等学校 島 智彦(シマ トモヒコ)

実践テーマ	学びを表現し、深めることができる生徒の育成—文化祭の調べ学習「方言」を通して—
実践区分 ○囲み	学級活動・ホームルーム活動 児童会・生徒会活動 クラブ活動 <b>学校行事</b> その他(具体的に、)
実践事例の 背景、ねらい、 意義など	<p><b>【1】実践テーマについて</b> 本校では、調べ学習の発表の場として文化祭が位置づけられている。本実践では、文化祭のクラステーマ「方言」を選択したクラスに焦点を当て、形のない「方言」について工夫した展示発表を作り上げ、一人ひとりが学びを表現し、深めることのできる生徒の育成を主題とする。</p> <p><b>【2】本校の文化祭について</b> 本校は神奈川県横浜駅近くに立地する、私立の女子中高一貫校である。毎年9月には、一般に開かれた文化祭が2日間にわたって行われ、近年は延べ5000人ほどの来校者数である。文化祭では、主にクラス単位(1クラス40名程度)で調べ学習の成果を展示・発表という形で披露する。調べ学習のテーマは5月頃から各クラス内で、自分たちがやりたいテーマの企画書を個人やグループで提案し、HRを中心に議論を重ねながら6月を目途にクラステーマを1つに決める。テーマが決まったら、7月上旬から小テーマに分かれ、HRや夏休みを利用して班毎に調べ学習を行う。内容を本やインターネットなどで調べたり、大学や企業に連絡を取りながら、講演を聞いたり、訪問をしたり、社会とつながることも大切にしている。その調べ学習の集大成として、文化祭での展示・発表がある。文化祭当日は教室が1つ割り当てられ、パネルに模造紙を張り付ける形式を基本としながらも、特にここ数年では「説明をわかりやすくするために、図表や写真、実物を展示する」「実験・体験などを通して、メカニズムなどを解説する」といった工夫がされてきた。本稿は、文化祭の調べ学習指導2年目である中3担任の著者が、本校の文化祭では一度も取り上げられることのない「方言」という形のないテーマを、これまでの文化祭や調べ学習の伝統を基軸としながら、生徒とともに日々試行錯誤し、文化祭発表につなげた取り組みである。</p> <p><b>【3】実践のねらい</b> 実践のねらいは以下の3点である。 &lt;①形のない「方言」について工夫した展示発表を作り上げる&gt; &lt;②生徒一人ひとりが学びを表現することができる&gt; &lt;③生徒一人ひとりが学びを深めることができる&gt;</p>
実践の時期	平成 28年 5月～9月

## 【実践事例】（成果と課題を含む）

以下は、テーマ決定後、7月上旬に行われるクラスの全体学習と小テーマ決め、そして小テーマ班に分かれてからの7月～夏休み～9月の準備、文化祭当日までの実践報告である。

### 1. 全体学習と国立国語研究所への訪問（7月上旬）

テーマ決定の段階のクラスの様子として、方言に関して、楽しそう、面白そう、かわいい、などと、肯定的なイメージを持っている生徒が多かった。最近のメディアや漫画などの影響ではないかと考えられる。しかし、そこには体験に基づく実感があつたり、深みがあつたりするようには感じられない。生徒の方言に対する肯定的なイメージを持続させつつ、身近に方言が少ない神奈川県だからこそ、書籍やインターネットからだけではなく、実際に方言と触れ、さらに、社会的、歴史的な側面などからも方言について学ばせる機会を持つことができないか考えた。

7月に全体学習の時間として、午前中（4時間）を文化祭準備に使える日がある。当日は1時間目に方言学習の全体像を説明し、2時間目は皆で体験的に取り組める各地方の方言カルタ（九州、東北、関東、京都）を文化祭費用の一部で購入し、作法室で実際に体験した（写真A）。3時間目は方言を利用した映画やCMなどを見た。4時間目には以前中学校2年生の教科書にも掲載されていた方言の歌を全体で合唱した。1時間目と3時間目は主に聞く、見るという座学の形式、2時間目と4時間目は体験という形式で構成し、飽きない工夫を行った。方言の歌は生徒が歌えるか心配であったが、生徒は多少恥ずかしがりながらも楽しそうに歌っていた（写真B）。

また、連絡を取っていた国立国語研究所の方から、夏にニホンゴ探検という企画があり、その中で方言の講演や展示があることを教えてもらい、希望者を募り訪問した。訪問で大きく2つのことを学べた。1つ目は、東京や神奈川にも方言が残っていることを知ることができたこと、2つ目は、ここで行われていた展示のほとんどが来場者の方に質問の答えのシールで貼ってもらうなどする、来場者参加型の展示を行っていたことである（写真C、D）。参加した生徒とともに、これらの工夫を今回の文化祭でも活かさないか考え、それが方言という形のないテーマを、分かりやすく、そして体験的活動を多く取り入れて伝えていくスタイルにつながった。



写真A



写真B



写真C



写真D

### 2. 小テーマ決めと班分け（7月上旬）

書籍や国立国語研究所への訪問での学びから、担任とクラスの文化祭委員で以下の小テーマを決めた。

- |    |  |
|----|--|
| 1班 | 方言の導入と歴史…「方言に興味をもってもらうには?」「方言の歴史」など    |
| 2班 | 地図から見た方言…「日本地図を床に貼って方言を分類」「神奈川の方言」など   |
| 3班 | 会話から見た方言…「発音やアクセントと地域」「関東・関西の違い」「挨拶」など |
| 4班 | 方言の体験…「方言を利用した大カルタ大会の企画」「紙芝居」「歌」など     |
| 5班 | これからの方言…「現代社会と方言」「メディアと方言」など           |

希望調査用紙をクラス生徒に配布し、全員の希望が第3希望までに入るように、担任が班分けを行った。

### 3. 班ごとの調べ学習～文化祭当日の発表（7月～夏休み～9月の文化祭当日まで）

発表の場である文化祭当日に伝えられることは限られているため、班ごとの活動に移った後は、担任として、「来場した方に一番伝えたいことは何か」、「学びを通して自分の中に残ったものは何か」、という点を常に問いかけるようにした。また、司書教諭に依頼をし、方言に関する9冊の本を教室に置かせてもらい、気になったときに調べられる環境を整備した。どの班も多彩に調べ学習が行えたと考えられる。以下では、各班の全体像・重点的な取り組みについて紹介する。(1)～(8)の順の発表となるように文化祭当日の教室レイアウトを決めた。(7)の方言カルタに関しては、広い場所が必要であるため、文化祭当日に体育館を時間を指定して借りた。

#### (1) 方言の導入（1班）

導入として、最初に来場者の方に方言に興味を持ってもらえるにはどうしたらよいか考えた。生徒とともに考えた内容は北海道で現在も使われている方言「投げる」である。「投げる」＝「捨てる」の意味であるが、この方言を知っていたのはクラスに1人だけであった。その生徒は、北海道に祖父母がいる生徒で、最近も祖父母が「投げる」という方言を使っているのを聞いていた。当日は、入って生きた来場者の方に丸めた紙を渡し、「このゴミを投げて下さい」と伝え（ゴミ箱は横に置いておいた）、意外性を持たせた導入を試みた。当日は好評で、知らない来場者の方は、ゴミを投げたり、戸惑ったりしており、生徒が、北海道の方言で「投げる」は

「捨てる」という意味です、と伝えると驚いていた（写真E）。一方、北海道出身の方も何人か来場し、その方とも話が弾んでいた。この他に、昔は方言であったが、今はそれが共通語になっている例をいくつか紹介した。

## （2）方言の歴史（1班）

最初、生徒は方言に関する年表を大きくして模造紙に書きだそうとしていた。しかし、それだけでは来場者の方にも生徒にも何も残らないと考え、「年表を調べて何を考えたか、また何を伝えたいか」という点を考えさせた。夏休みを通して学習した生徒から、時代によって方言に対する捉え方が変わってきた点を伝えたい、という意見が出たので、それが展示に表せるような工夫を考えさせた。生徒は年代ごと方言がどう捉えられていたか、年表に顔の表情をつけて展示し、それをもとに発表を行った（写真F）。

## （3）地図から見た方言（2班）

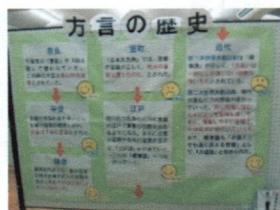
生徒は地図を用いた展示がしたいと話をしてしたが、それだけでは本の拡大展示と同じになってしまう。生徒と一緒に考え、東京に近いという地の利を利用し、東京・有楽町・銀座近辺に広がる各地方のアンテナショップのお土産を利用することにした。地方のお土産の中で方言を使っているもの（安価なもの）を探し、それを地図と対応させることを考えた。生徒と夏休み中にアンテナショップを訪問し、生徒が文化祭の趣旨を店員の方に伝えた上で、方言で宣伝されているお土産を紹介してもらいながら、多くの地方出身の店員の方とコミュニケーションを取ることを意識させた。北海道、東北、近畿、中国、四国、九州地方、計13件のアンテナショップを巡り、方言を利用したお土産17点を購入した。アンテナショップでは各地方の特徴的な方言を教えてもらったりもした。文化祭当日は拡大した地図を床に貼り、来場者の方にその周りに足を運んで実際に買った方言を利用した商品の展示、さらにそこで使われている言葉から、その地方の方言の特徴などをまとめた（写真G）。さらに、神奈川の方言を利用したお菓子、「おこじょ（多摩地方の方言）」も見つかり、同時に展示した。

## （4）会話から見た方言（3班）

分かりやすい導入として、告白表現、敬語表現、罵倒表現の地域差を展示し、どの方言で告白されたいか、などアンケートを取り、実際に投票してシールを貼ってもらう取り組みも行った。その後、関東と関西のコミュニケーションの取り方の違い、ボケ・突っ込みの文化などの説明を行った（写真H）。生徒は、漫画の会話フレーズを実際に方言に訳して展示したりしており、多くの来場者の方が足を止め、質問をしたりしていた。



写真E



写真F



写真G



写真H

## （5）地方出身教師による方言ビデオ（4班）

4班の生徒たちは、本校の地方出身の教員に依頼をし、了承を得られた5名の教員に方言を使って話をしてもらうことにした。当初は何か一つのテーマについて話してもらうことも考えたが、最終的に各教員の持ち味を自由に出してもらって話をしてもらうことになった（写真I）。例えば、青森出身の教員には方言で自己紹介と青森のPRを、演劇部顧問の教員には、シェークスピアのセリフを、方言で話してもらった。

## （6）方言を利用した歌（全員）

生徒も含めた同世代が楽しめる歌1曲、子どもや年配の方誰でも知っている歌を1曲選定してそれらを方言で歌った。指導してもらっている音楽科の教員の助けも借り、また、元来歌の好きな生徒ばかりであるため、文化祭直前の練習であったが、自信を持って歌うことができた（写真J）。

※（5）、（6）の内容はビデオで撮影し、当日テレビを教室の一角に設置して交互に上映した。

## （7）来場者の方と楽しむ大方言カルタ（4班）

方言を利用したカルタは、全国様々な地方で取り組みがされている。今回、大人数で一斉にできるように大型の方言カルタを作った。7月の全体学習で、自分たちも方言カルタで遊んでいるため、イメージを持てた。方言カルタが作られた主な理由は、その地方で大切にしてきた言葉を残していくためであるということを知り、当日来場者の方に参加してもらう前に、方言カルタの趣旨を伝えた上で、楽しんでいただいた。小さい子どもの方も安全に遊べるよう、職員以外の生徒もサポートをして、安全管理にも努めた（写真K）。

## （8）これからの方言～まとめに変えて～（5班）

過去に方言による差別や、それに関連する様々な事件（殺人事件も含む）があったことを紹介した。一方、最近では方言が好意的に受け入れられている傾向があり、その中でも漫画は生徒にとっても馴染みのあるものである。夏休みの時間に、時間を決めた上で、近くの書店に行き、方言が分かりやすく利用され、かつ多くの年代が知っている漫画を数点購入した。漫画は著作権の関係もあるため、実物を展示し、そこに吹き出しをつけて、どの地方の方言であるか解説を加えた（写真L）。また、方言カルタが作られた趣旨と同様、方言を利用した

地域活性の取り組みも多く行われている。例えば宮崎県小林市のCMが有名であり、その解説なども行った。



写真①



写真②



写真③



写真④

#### 4. 成果と課題

実践事例の3つのねらいに即して、成果と課題点を述べる。

##### <①形のない「方言」について工夫した展示発表を作り上げる>について

初期の段階では生徒の方言に対する肯定的なイメージを壊さないようにしつつ、直接的でないにせよ、少しでも体験的な学びができるように、担任が率先して調べて生徒に見通しを伝えた。初期は担任が率先したものの、途中からは生徒が担任のアイディアを乗り越えてくれることを信じた。予想通り、全体学習で学んだことを生徒はさらに発展させて当日の展示・発表に見事につなげた。例えば、方言が利用されている漫画を利用して説明をする、体育館での大カルタ大会の運営を行う、地方出身の先生にインタビューをする、などの生徒の発想と行動力には驚きを感じる。また、大日本地図を作った班はアンテナショップで実際に現地の方言を紹介してもらいながら自分たちの足で集めた各地方の方言に関するお土産をもとにした展示を行うなど、自分たちの足や手を動かして社会とつながる学びも行った。これらを実行できたことは生徒の大きな自信につながった。一方、地元の神奈川や横浜の方言については、多摩地方の方言を利用したお菓子「おこじょ」の展示はできたものの、それ以外については十分深めることができなかった。時間的な制約もあったものの、地元だからこその取り組みにも目を向けることができれば、より深まりのある展示発表となったと考える。

##### <②生徒一人ひとりが学びを表現することができる>について

各班は様々な工夫を行い、来場者の方にどのようにすれば伝わるかを真剣に考えた。方言の導入を担当した班は実際に来場者の方にゴミを投げて(捨てて)もらう活動を行ったり、自分たちで歌詞を方言に訳して歌を歌い、それをもとに説明をしたり、方言カルタをその趣旨も含めて実演するなど、形のない「方言」を多彩な表現で工夫ができた。文化祭1日目の午前中は少し戸惑う生徒もいたが、常に生徒に意識させてきたこともあり、少しすると教員が声をかけなくとも文化祭2日間通じて、生徒自ら工夫をしてポイントを絞った説明を行っていた。文化祭後の生徒アンケートからも自信を持って説明できた、という感想が多数見られた。

##### <③生徒一人ひとりが学びを深めることができる>について

文化祭後の生徒アンケートからは、方言が差別をされていたという事実を知ることなど、知識獲得による驚きや、さらに深めていきたいという継続的な学びに関する感想も見られた。また、来場者の方の感想にも、方言に興味・関心を持ち、もっと知りたくなったという感想が多く見られた。次の文は、まとめを担当する5班の生徒を中心に展示発表の最後の模造紙に掲示したまとめの文章である。

『<まとめ> **方言を学んで** 方言の学習を行って、方言は古くから、各地方においてコミュニケーションの一つとして多くの人に親しまれてきたことが分かった。それは、何十年、何百年もの時を経て受け継がれ、各地方の文化のシンボルとしても今に至る。**方言の危機** 日本の多くの方言が消滅の危機に直面している。その原因とされているのが、「限界集落の増加により、方言の担い手(特に若者)がいない」、「方言に対するマイナスの価値観を植え付けられた世代が方言で子育てをしない」などであり、今回調べた中で方言による殺人事件があったということも衝撃的であった。**これからの方言** このような中、メディアなどによって方言の魅力を感じ、方言を話すことでその地方独特の温かさを感じたり、自分のアイデンティティを表したり、共通語では言いにくいことを伝えられたり、というポジティブに捉える動きも広がってきている。今回、私たちは方言を調べるにあたり、展示と共に次のような工夫をした。①方言で歌を歌う・方言カルタを行う②各地方出身の先生方にお話しを伺う③有楽町のアンテナショップを巡り、方言を使ったお土産を探す。これらを通して、方言を身近に感じ、楽しむこと、方言を理解することは、地方への関心を高め、その文化を学ぶことでもあることを実感した。言葉が多様であればあるほど、人間文化を豊かにしてくれる。方言が時代にに応じて受け継がれていくことを今後も期待したいと考える。そして、これは日本各地における過疎の問題など、これからの日本、世界の問題を考える私たちの課題でもある。』

文化祭前日に上記のまとめをクラス全員で共有してから当日を迎えた。来場者の方からも楽しさだけでなく学べる展示であったとの感想も複数寄せられた。一方で、クラス全体で共有はしたものの、上記のまとめは5班の生徒が中心に書いたものである。一人ひとりが深められる時間を文化祭前後に取れるとさらに効果的だったと考えられる。今後、展示準備の効率化と一人ひとりが学びを深化させる具体的方法の開発が必要である。

以上より、本実践は課題もあるものの、ねらいは一定達成できたと考えられる。今後、異なるテーマの調べ学習においても、今回得られた知見を活かして、実践を積み重ねていきたいと考える。